

# 石垣市新川に伝承される念仏歌「七月念佛」について

飯 田 くるみ

## はじめに

石垣市四箇の新川地域では、毎年旧盆の送り日に獅子祭りが行われる。本稿では、この獅子祭りの調査報告を行うと共に、行事歌の「七月念佛」<sup>しちがつにんぶじやう</sup>の伝承について考察する。

新川地域の「七月念佛」は、三線の伴奏無しに歌われる珍しい念仏歌である。しかし、その存在はこれまでほとんど知られてこなかった。今回は詞章と旋律の分析から、この歌の特徴を明らかにしたい。また、同じ四箇の登野城地域で行われている獅子祀りと事例を対比し、両地域の獅子祭りで念仏歌が果たす役割と、行事自体の意味についても考える。

## 1. 字新川 獅子祭りの概要

平成22年度の行事は以下の様に行われた。

日 時：平成22年 8月24日 午後3時～

場 所：真久田春子 宅

主 催：新川字会

式次第：

- |                               |       |      |
|-------------------------------|-------|------|
| ① 開会のことば                      | ----- | 字副会長 |
| ② 会長あいさつ                      | ----- | 字会長  |
| ③ 獅子頭への拝礼                     | ----- | 全員   |
| ④ 長老による口飾り                    |       |      |
| ⑤ 獅子祭りの謡                      | ----- | 全員   |
| 「七月念佛」「とうんぎゃーら」「ミルク節」「やーらーよー」 |       |      |
| ⑥ 乾杯の音頭                       | ----- | 前字会長 |
| ⑦ 閉会のことば                      | ----- | 字副会長 |

新川の獅子祭りの日取りは旧暦の7月15日で、八重山諸島で獅子祭りやイタン

キバラ（又はイタツキバラ）行事がよく行われる旧暦7月16日より、1日早く設定されている。この日は盆の送りの日で、青年達の精霊アンガマもある。獅子祭りは夕刻に、字内の新築の家<sup>1</sup>で行われている。主催は字会で、参加者は字会役員を始めとするウヤジュウ（親衆）の面々である。

以下、行事の詳細を式次第に沿って紹介する。

- ① 開会のことば
- ② 会長あいさつ

真久田家と参加者の行事存続への協力に対して感謝が述べられた。また、この中で獅子祭りは会場となる新築の家の繁盛と家族の健康、幸福を祈願するとともに、新川字会、字民の健康と世果報を願い、字民の無病息災を祈る恒例の行事であると説明があった。<sup>2</sup>

- ③ 獅子頭への拝礼

床の間の前の獅子頭に向って一同拝礼。獅子には沖縄香、塩、洗米、酒、神酒等<sup>みす</sup>が供えられている。

- ④ 長老による口飾り

長老2名が獅子頭の鼻に塩を盛り、そこに酒を注いだ後に口飾りを行った。口飾りが終ると、参加者全員に神酒<sup>みす</sup>がふるまわれた。

獅子祭りの口飾り<sup>3</sup>

「ウートドゥ ススヌ カンヌ マインガ ススマツルユ アゲー シ  
サリダツケンヤ スキウケ トウリ アラカー ムラジュ ユ カルイ  
ツケー タボーリ ヤン ハナスキンヌ クーバン シウマヌ ストー  
マカイ ナガシ トーリ アラカー ムラジュ ユ ドウ ズウサ ケ  
ンコウ アラスメートーリ イークト タンガー ンカイ スメー タ  
ボリヌ ニガイユ シサルナーラ」

祈願の言葉を申し上げます。獅子の神の前に獅子祭を、執り行ないますので、聞き受けて下さい。新川住民を守っていただき、病気、風邪が流行しても、島の手の方へ流してもらいたい、新川住民が健康で、良い事だけをもたらして、いただきますようお祈りします。

## ⑤ 獅子祭りの謡

「七月念佛」「とうんぎゃーら」「ミルク節～やーらーよー」が斉唱された。三線の伴奏は無く、太鼓2つと銅鑼1つの鳴り物が加わる。これらは若手が担当する。



〈写真1〉 字新川 獅子祭りの様子。座の中央に太鼓と銅鑼。ウヤジュウは獅子を囲むように一番座と二番座にまたがって座っている。(2010. 8. 24 飯田くるみ撮影)

各歌の始めと終わりには太鼓と銅鑼を連打する。

### 「七月念佛」

詞章と旋律は第二節で紹介する。「七月念佛」は1年に1回この時にしか歌わないため<sup>4</sup>、行事の始まる前に簡単に練習が行われた。最後のユングトゥの部分では太鼓と銅鑼を止める。歌の大要は、両親を失い後継ぎとなった子が2人のために経を書き、読み、受け取って下さいと呼びかけ、さらに七月のお盆には持ってくる宝もあるので、喜んで下さいというものである。

### 「とうんぎゃーら」

旋律は第二節で紹介する。『新川村古謡集 第一集』には、「とうんぎゃーら・ユンタ」として収録されている。この歌は同じ年の豊年祭2日目の朝、真乙姥御嶽でのミシャグパーシィ<sup>5</sup>を終えた直後にも歌われた。<sup>6</sup>この時は手拍子で歌うスタイルであった。3拍子で、1拍目は胸の前で合わせた手を下方に開いていき、2拍目で腹の前で打つ。そして、その手を合わせたまま3拍目で胸の前に戻す。すると、自然と祈る姿勢になる。

とうんぎゃーら・ユンタ (出典：『新川村古謡集 第一集』)

あーるーかーらおーるふーにーや (ヒヤー)  
ばーがーういぬとーんぎゃーらー  
シヤアーハミユーシヤアハミ  
ヒーユウパーナウル

原歌

- 一、あーるから おーる ふにや
- 二、なゆしきぬ ふにやる
- 三、みるくゆどう ぬせおーるよ
- 四、ふくぬゆどう ぬせおーるよ
- 五、じいまだうじいま ふに つきや
- 六、うらぬまいどう ふにつき

訳

- 東方大海原からくる大船は  
なんという異形な大船であろうか。  
弥勒の豊年を満載して くる神の船  
裕福な世を満載して くる船のようだ  
何処が碇泊地であるか  
藏元政庁の南の海岸が入港地である

※『新川村古謡集 第一集』には記されていないが、歌の最後に

「ヒヤー チョンヨーチョン、ヒヤ マイ ツクチョン、ヒヤー アー ツクチョン、ヒヤ ユバ ナウレー、ユバ ナウレー」と2拍子で歌い唱えられる。

これと同系統の歌に石垣島大浜集落の「すんきやあらゆんた」(別名「東から」、白保集落の「東からゆんた」、伊原間集落の「東節」、竹富島の「とうんちゃーま」、新城上地島の「あがるから・じらば」等がある。『竹富島古謡集 (第四集)』によると、竹富島の「とうんちゃーま」は旧暦8月8日の早朝に島の西の浜で「ニーラン神」を迎える「世迎い」の祭りの時に歌われる。「とうんぎゃーら」にも海の向こうからやって来る神の船が豊年をもたらす、という内容が歌われている。

「ミルク節」～「やーらーよー」

八重山では慶事の終わりには「ミルク節」、続けて「やーらーよー」を歌って結ぶ慣例があり、「やーらーよー」は念願成就、心にあふれる喜びの気持ちを歌い、満足の意を表しているという。<sup>7</sup>新川古謡ユンタ保存会会長の嵩本安意氏は、「ミルク節」の2番は「弥勒世やいもち遊ばばん遊び 踊らばん踊り御許しでむぬ」と、遊ぶことを許されたかと歌っており、これは、役人によって種々のことが禁止された過去を映しているであろう

と語る。

⑥ 乾杯の音頭

参加者は一品携帯の酒と料理で歓談を楽しんだ。合間には、長老が獅子祭りの由来<sup>8</sup>や昔のエピソードを紹介した。

中でも興味深かったのは獅子舞についての話である。現在、新川の獅子が舞うのは南風ぬ島<sup>はいすま</sup>カンター棒<sup>9</sup>を披露する時のみで、必ずカンター棒とセットで行われている。

今回の獅子祭りも、獅子頭に対する儀式のみであった。しかし、何人かが過去に獅子祭りで獅子舞が行われていたことを記憶していた。

照屋玄氏（昭和元年生）が子供の頃には、獅子祭りには獅子舞を見ようと集まる風景があったそうである。カンター棒は付かず、獅子だけを庭を清めるためにやった。獅子舞は獅子祭りを含めて年に4、5回あり、思い出深いのは昭和16年に字の敬老会で、真乙姥御嶽の庭で獅子を被ったことであるという。青年会の余興としてやったもので、この時も獅子だけを舞わしたという。また、同じ年の字会館の落成式の時には清めでカンター棒と一緒にやったそうである。

嵩本安意氏（昭和12年生）も獅子祭りで2回、獅子が舞うのを目にしている。その内の1回は、昭和36年に瓦葺の家を新築して自宅が祭りの会場になった時で、家の裏の空き地で舞ったという。また、祭りの後には請福酒造のあたりなど、大きな辻でも獅子が舞ったそうである。

獅子祭りでも獅子舞をカンター棒と一緒に見たという人もいた。これらの話から、新川の獅子舞は獅子だけで行う場合と、カンター棒と一緒に行う場合の両方の場合があり、かつては獅子祭りでも行われていたことが明らかになった。

⑦ 閉会のことば

字副会長の挨拶の後、「ミルク節」「やーらーよー」が再度歌われ御開きとなった。

以上が、字新川の獅子祭りの内容である。

獅子祭りの日取りが15日であることについては、嵩本安意氏からこのようにお話を伺った。「新川の獅子祭りも元々は16日に行われていたが、お盆の後にいつ

までも遊んでいられないと生活改善の目的で1日繰り上げられたらしい。これに象徴されるように、新川は非常に真面目な村である。しかし、昔は16日に慰労会のようなものが行われ、狂言やカンター棒などが行われていたとも聞いたことがある。」氏は獅子祭りの席で、日取りを本来の16日に戻すべきではないかと訴えておられた。

また、獅子祭りをこの時期に行うことについて、入嵩西清佐氏は著書にこう記している。

ところで、獅子頭はデイゴの木で彫刻するのであるが、デイゴの木は常に蒸さない虫が付き易いといわれている。新川村では蒸す時の薪は、豊年祭の時に村の若い男達が控所に集めた残りがあるので、これを利用することになっている。それで新川村の獅子祭りは、豊年祭が済んで旧暦七月十五日のお盆の送りの日に行う事になっている。(入嵩西2001 pp.177)

25、6年程前までは、旧盆の約1カ月前に塩水を炊いた蒸気で獅子を蒸していたそうで、この作業は老人会が担当していたという。しかし、現在は市立博物館が燻蒸を行う時に、一緒に防虫の処理をお願いしているということである。

## 2. 「七月念佛」の詞章と音楽

次に「七月念佛」の詞章と旋律を紹介する。それぞれ詞章1、譜1として掲載している。

詞章は番号が付いているように一節が3句から成るが、この単位で内容的なまとまりはない。大きな特徴は、終わりの詞章が“ユングトゥ”として独立していることである。しかし、これは歌謡ジャンルのユングトゥとはまた別物で、唱え的な(誦む)部分であることを明示するためにこの名称が使用されたのではないと思われる。独立させ、意味を強調しているようにも見える。

旋律の方も3楽句から成り、それぞれが詞章の各句に対応している。第1楽句の後には第2楽句への間をつなぐように、旋律のついたハヤシが主唱者の内の数人によって歌われる。ユングトゥの部分は、ほぼ同じ旋律が2回繰り返されてきている。この一部(後半の26-27、30-33小節)は、歌の3楽句目の最後(19-22小節)の旋律と似ていなくもないが、基本的には歌の旋律とは異なっている。

興味深いのは、「とうんぎゃーら」（譜2）の最後部も独立した構造をしていることである。嵩本安意氏に伺うと、新川ではこのような独立した歌の締めくくりの部分の総じて“ユングトゥ”と呼んでいるという。しかし、「とうんぎゃーら」の同部分にそういった記載はない。また、こちらは旋律無しに唱えられる。八重山の古謡の中には、このように最後部に唱え的な句がつく歌が幾つかある。例えば、石垣島宮良の「牧祝のアヨー」、黒島の「九月祝いの歌」「家作りジラバ」、竹富島の「家崇び」等がある。これらはいずれも祈願と関わる歌である。この句には、①全体に旋律がつくもの、②一部が旋律化し残りは唱えられるもの、③全体が唱えであるものの3種がある。しかし、旋律がつく場合でも、それは歌本体の旋律とは異なっている。「牧祝のアヨー」<sup>10</sup>は②のタイプで、「ウヤキヌ ユバナウリヤ カバイヌ ユバナウリヤ ピャーシヨー ピャーシヨー ユーバーナウレー ユーバーナウレ」（富貴ノ世ハ稔レ 香バシイ世ハ稔レ 栄ヤセヨ 栄ヤセヨ 世ハ稔レ 世ハ稔レ）という独立した句が歌の終わりにつく。「ウヤキヌユバナウリヤ カバイヌ ユバナウリヤ」までが旋律で、あとは唱えである。CD「沖繩の古謡 八重山諸島編上巻—石垣島—」<sup>11</sup>は、同部分を“裏声”<sup>12</sup>として扱っている。確かにここで曲の調子は変わり、条件は備わっている。しかし、旋律が移った後、すぐに唱えに入るのは比較的特殊な例である。これを“裏声”とするなら、上の①②の歌はどれも“裏声”の一種に数えられるだろう。言うなれば、ユングトゥ（誦み言）的“裏声”か。

また、「七月念佛」には三線がつかないため、間奏が無く楽句と楽句の間隔が短くなっている。念仏歌は現在、琉球列島の多くの地域で傳承されているが、三線を伴わない例は極少ない。沖縄本島北部の女エイサーと石垣市大浜の事例があるが、この他には確認できない。<sup>13</sup>新川の「七月念佛」は貴重な伝承例である。念のため嵩本氏に伺ったが、この歌を三線で歌ったという話は聞いたことがないという。

「七月念佛」の、終わりの詞章がユングトゥとして独立して歌われる構造と、三線を伴わずに歌う唱法には八重山の古謡に似るところがある。実際、この歌は『新川村古謡集 第一集』にも収録されている。この特徴は外来の念仏歌が傳承される中で、土地の音楽の影響を受けて変容した一側面ではないか。「無蔵念仏節」が節歌に改作される一方で、新川の「七月念佛」は古謡の歌い方に影響を受

## 詞章 1

- 【凡例】・後に行う比較の便宜上、詞章を内容からA～Gの7つの部に分けた。  
・\*の部に「ヒヤルグユイサ」というハヤシが入る。

字新川「七月念佛」(出典:『新川村古謡集 第一集』)

A	1 あぬやまてらに さしうりて *	あひの山寺に込もつて
	むぬぬ あわり やりてからや	事の苦勞もあつた
	いまじよう さんなる ちくでんさ	今 わかつたと つたえる

B	2 ふたりぬうや あとうぼとうり *	二人の親の 後継ぎを取り
---	--------------------	--------------

C	にしにむかゆて きょうむん かき	西に向つて 経文を書き
	ひがしにむかゆて きょうむん ゆみ	東に向つて 経文を読む

D	3 かくだる きょうむん ちちがたみ *	書いた経文は 父のためである
	ゆむだる きょうむん ははがたみ	読んだ経文は 母のためである
	うきとりたまわり ちちがはは	受け取つて下さい お父さん お母さん
	4 うきさしたまわり ちちがうや *	受け取つたのは 父親である
	さしうきたまわり ははがうや	差し上げたのは 母親でに
	ふたりぬうやぬ たみどうもうす	二人の親の ためにと 申し上げた

E	5 うじぬすらういな さびぎざしむぬ *	キビの茎 ナスビを 刻んで
	しそいぬはんき すいぬみずう	シーソの葉に きれいな水
	そりかはぬくゆる うちやどうみず	そり合せ お茶道水
6	くばししる そやかあんや *	零して捨てるより
	ふかにいるそろんに まつらな	外にいる佛に 奉つた方が
	ふたりぬうやぬ たみになる	二人の親の ためにもなる

F	7 くるゆ七月 なかぬそうろん *	来る七月の 中の盆は
	むちゆるたからぬ ありばくそ	持つてくる 宝物も あるので
	ふたりぬうやよまは いらさなり	二人の親よ よろこんで下さい

### ユングトウ

G	しゅんぢやなる ことぬ ヨー いやなはみだぶとうきまい
	ふたりぬ うやぬヨー いや たはみどうもうす



譜 1

- 【凡例】・実音は一オクターブ下  
 ・歌の旋律は、各楽句を判別しやすいように一段ごとにおさめた。そのため、一段の小節数は一定でない。

字新川「七月念佛」

採譜 飯田くるみ  
 (2010年8月24日調査)

♪太鼓・銅鑼

1. あ ぬーや まーてい ーらに ヨーさーしーう ーりー ていひゃルガ

ユイサ む ぬーぬーヨーあ わーり やー ていー からーや

いまー じょー さーんーなーる ーちーく ーでーんー さ

(7番まで繰り返す)

ユングトウ

13 しゅんぢや なることぬ ヨーいや なーみだぶとうきまい

28 ふたり ぬうやぬヨー いや たーみどう もーす

## 譜 2

- 【凡例】・実音は一オクターブ下  
 ・ハヤシと最後部はリズムのみを表示した。音高は反映されていない。

### 宇新川「とうんぎやーら」

採譜 飯田くるみ  
 (2010年8月24日調査)

歌

↓ 缸・銅鑼

1. ある から おーる ふー にー やー

↑ ()内の旋律は2番以降  
 最初の小節だけ2/4拍子になる

歌

ば が ういぬ とうんぎやーら シャアハ

歌

ミ ユ シャーハ ミ ヒ ユーバー ナウル (6番まで繰り返す)

### 最後部

歌

ヒヤー チョンヨー チョンヒヤー マイツク チョンヒヤー アーツクー チョンヒヤー

歌

ユー パー ナウレ ユー パー ナウレ

けた可能性があると考える。

### 3. 「七月念佛」の伝承について

#### (1) 「無蔵念仏節」との関係

字新川には「七月念佛」の他に「無蔵念仏節」という念仏歌が伝承されており、「無蔵念仏節」の方は旧盆の精霊モーションアングマで歌われている。四箇の他の字で伝承されているのもこの「無蔵念仏節」である。譜3は、新川の「七月念佛」と「無蔵念仏節」の音楽を比較するために作成した旋律の比較譜である。新川で伝承される2種の念仏歌がどのような関係にあるのか。この資料を用いて分析する。なお、「無蔵念仏節」の詞章は八重山古典民謡の工工四等で確認が容易であるため、現在アングマで歌われている一節分を譜3の中に記入することでその掲載を省く。

両者の旋律を比較すると、「七月念佛」の方は「無蔵念仏節」よりもシンプルで素直な進行をしていることが分かる。強拍の1拍目の音にシラブルが当たっていることが多く、旋律に対して詞章がバランスよく配置されている。それに対して、「無蔵念仏節」はシンコーペーションの多い複雑な旋律となっている。三線の誘導で歌の旋律がつながっていつている。そのためか、よりメリスマティックで、楽句の中間部にその特徴をよく見ることができる。しかし、これは詞章によって若干違いはあるだろう。

「無蔵念仏節」の三線の旋律を円で囲んだ(1)(2)は、それぞれ第1楽句と第2楽句、第2楽句と第3楽句の間奏である。(1)の時は、三線がつかず間奏のない「七月念佛」にもハヤシが入るため、その後に小節のズレは起こらなかったが、(2)の時は「七月念佛」で第3楽句がすぐ続くため、それ以降(17小節以降)は両者の旋律に楽譜上のズレが生じている。音符をつないだ点線を見ると、一目瞭然である。また、「無蔵念仏節」にはユングトゥがなく、現在精霊アングマではこの歌は現在一節しか歌われていない。このように、新川の「七月念佛」と「無蔵念仏節」は同じ地域の念仏歌であるが、異なる旋律と歌い方で伝承されている。三線の有無がこの差を生んだ大きな要因と考えられるが、細かい差を除けば旋律の基本が同じであることもまた明らかである。

譜 3

- 【凡例】・「無蔵念仏節」は2008年の旧盆に飯田が採録したものを、「七月念佛」の旋律の高さに合わせて移調した。実音は長6度下である。
- ・「無蔵念仏節」の笛の旋律は、楽譜の煩雑化を避けるために省略した。笛は歌と沿うように奏でられる。
- ・「無蔵念仏節」の楽句の間の間奏（三線）を(1)(2)の記号で示した。
- ・→部分の旋律は比較の便宜上、ずらして配置した。

## 念仏歌比較譜

～宇新川の「七月念佛」と「無蔵念仏節」～

作譜 飯田くるみ

七月念佛

あぬ—や—ま—てい—ら—に

旋律

無蔵念仏節

三線

う—や—ぬ—よ—う—ぐ—ぬ

七月

ヨ—さ—し—う—り—てい—ヒヤルガ—ユイサ—む

旋律

無蔵

三線

は—ふ—か—き—む—ぬ—(1)—ち—ち

↑録音が不明瞭で採譜できないため、  
『声楽譜附八重山古典民謡工工四 下巻』で  
この部分を補った。

七月

ぬ—ぬ—ヨ—あ—わ—り—や—てい—

旋律

無蔵

三線

—ぐ—う—ぐ—ぬ—は—や—ま—

七月

16 から - や いま - じよ - さ - ん - な - る

旋律

無蔵

たか - さ (2) ばば - ぐ - う - ぐ

三線

七月

21 - ち - く - で - ん - さ

旋律

無蔵

は - う - み - ふ - か - さ

三線

28 ヨングトウ

七月

しゅん ぢや なることぬ ヨーいや な - みだ - ぶとうきまい

旋律

無蔵

三線

33

七月

ふたりぬ うやぬ ヨーいや た - みどろ - も - す

旋律

無蔵

三線

ところで、喜舎場永珣が念仏歌について『八重山民俗誌（上巻・民俗篇）』所収の『アンガマ』と無蔵念仏』の中であらまし次のような記述をしている。

八重山のアンガマには二つの系統があり、一つは石垣町<sup>14</sup>の治者階級であった士族だけに限られたもの、もう一つは各離島及び農村各部落即ち平民部落に行われているもので、士族のアンガマでは無蔵念仏を座開きの序幕に謡ってから続いて踊りをするが、他の系統農民団では七月念仏、グフダイ念仏、チョンジョン念仏等を主に謡い無蔵念仏は附けたりにしている。農村部落のアンガマが庭の円陣舞踊であるのに対して、全てを被治者階級と異にしようとした士族のアンガマは、円陣舞踊から座敷の上で行う舞踊へと進展し、ユーモア口調で教訓を語るウシュマイ（爺）とンミー（姥）を登場させた。歌詞や踊の形式なども優に平民部落のものが古い型で、歌詞のききも浄土宗の御詠歌から改作編曲したようである。

つまり、アンガマには士族によるものと、農村部落で平民によって行われたものの2種があり、歌う念仏歌の種類とやり方がはっきり分かれていたということである。石垣島の四箇は士族が居住していた地域で、現在も旧士族村として他の地域と異なった意識がある。喜舎場が言った士族のアンガマとは、この四箇村で行われる精霊アンガマのことで、もう一方は石垣島のそれ以外の地域と、離島で旧盆中に行うアンガマのことである。「士族の精霊アンガマでは『無蔵念仏節』を歌い」と喜舎場が言ったように、現在でも石垣島四箇の精霊アンガマでは「無蔵念仏節」のみが歌われている。そのため長い間、この地域で伝承される念仏歌はこの種類だけであると認識されてきた。しかし今回、宇新川には「七月念佛」の伝承があり、アンガマとは別に歌われてきたことが明らかになった。しかも、三線を伴わず古謡風に歌われ、詞章も最初から最後まで通して歌う。この「七月念佛」の伝承について、私達は現在どう捉えたらよいのであろうか。喜舎場はまた、次のような情報も記している。

石垣町の農民部落も他の農村アンガマの民衆踊を五〇年前までは漸く保存していたが、と古老は話していた。（喜舎場1977 pp.389）

四箇村には士族の他に平民も暮らしており、マフタネー（現在の4号線以北）がその主な居住地であった。大正以後は、この付近がアンガマの盛んな地域であったとも聞いている。喜舎場が上で言っている“石垣町の農民部落”も、どう

もこのマフタネー地域のものである。石垣町の他の字に、盆のアンガマがあったという話は耳にしたことがない。そして、四箇村に50年前まで（この論稿の最初の発表は昭和21年）農村アンガマの民衆踊<sup>15</sup>が残っていたとすると、これはやはりマフタネーの農民（平民）によって伝承されてきたとしか考えられない。土族によるアンガマが洗練されて精霊アンガマとなったのも、同村にその元となったアンガマ、つまり農民（平民）のアンガマがあったからではないか。とすると、新川に「無蔵念仏節」以外の念仏歌、すなわち「七月念佛」が伝承されていたとしても不思議ではない。旧慣の身分制度が廃止され、精霊アンガマで歌われる念仏歌が「無蔵念仏節」一本に絞られた後も、新川の「七月念佛」は獅子祭りで歌われてきたゆえに、失われず伝承されてきたのかもしれない。三線を伴わないのも、平民によって歌われてきた証であろうか。

## (2) 八重山各地に伝承される「七月念仏」との関係

八重山の各地には、新川の「七月念佛」と同系統の念仏歌が今も伝承されている。実は、この種類は「無蔵念仏」「御譜代念仏」と並ぶ八重山諸島の念仏歌の3大レパートリーの1つで、現在最もよく聞かれるものである。波照間島では「<sup>しきにんぶち</sup>供念仏」、与那国島では「かぬ山念仏」というが、他は大体「七月念仏」という名称で呼ばれている。石垣島では他に宮良と大浜地域で歌われているが、新川の「七月念佛」と詞章が最も近い関係にあるのは竹富島の「七月念仏」である。竹富島の「七月念仏」は、旧盆の中日にアンガーで歌われる。アンガーは、平民のアンガマとして精霊アンガマとよく比較される芸能である。

詞章2は、新川の「七月念佛」と竹富島の坡座間集落で採録された「七月念仏」の詞章を比較するために作成した資料である。比較の便宜上、「七月念佛」の詞章を7つの部分に分けてある。ここでは、このA～Gの記号に沿って両者の違いを見ていく。両者で大きな異同が見られるのがD～F間である。EとFの両親への供え物をする内容を歌った部分が、竹富島の「七月念仏」では順序が逆になっている。また、Gのユングトゥの部分は竹富島の「七月念仏」にもあり、「七月念佛」よりコンパクトな形で歌われていることが分かる。Fの一行目の網掛けをした詞章にも注目したい。「七月念佛」でこの詞章は後方にきているが、竹富島の「七月念仏」では真ん中にあり、父母祖母に経文を受け取っ

て下さいと呼びかけた後に、何時来ると尋ねたことに対する返答になっている。竹富島で島の識者2名から聞いた話によると、この「七月念仏」は「来る夜は 七月ぬ 中ぬ精霊」と歌われているため、旧盆の中の日に歌うという。竹富島の「七月念仏」で前方に配置されていることには、このような思想が関係しているように思われる。

譜4は竹富島の「七月念仏」の旋律譜である。「七月念仏」は三線にのせて歌われる。「七月念佛」と同様に、「七月念佛」のユングトゥの部分（詞章2のG）にあたる最後の詞章「尊重なる徳目や～」の旋律は独立しており、それ以外は3楽句が繰り返される。しかし、独立部の旋律が3楽句の旋律の部分の組み合わせから成ることは「七月念佛」と異なっている。(1)は第3楽句の前半、(2)は第1楽句の後半、(3)は第2楽句から創作されたようである。また、3楽句の旋律も「七月念佛」と大分異なっており、特に第3楽句の差異は大きい。これは石垣島の「無蔵念仏節」とも違って、竹富島で別に洗練化したことがうかがえる。他の離島の「七月念仏」にも、「七月念佛」のユングトゥにあたる詞章が存在するものがある。全てを把握していないが、この場合は竹富島と同じように歌のメインの旋律から旋律が付けられていることが多く、字新川の「七月念佛」のような例は珍しい。

また、竹富島以外の地域の「七月念仏」と関係がどうかというと、他の「七月念仏」には、それぞれの土地で各詞章について連想することで生じたと思われる詞章が加わっており、複雑である。それと比較すると、新川の「七月念佛」と竹富島の「七月念仏」の詞章はシンプルである。旋律の差異については、一概に言う事が更に難しい。

### (3) 沖縄本島の「山寺」念仏との関係

「七月念仏」は八重山の念仏歌の主要レパートリーであるが、このタイプの詞章は伝播の元である沖縄本島では現在全く聞かれない。また、琉球列島各地で伝承される念仏歌は普通、チョンダラーの念仏歌を採録して作った念仏集等の文献に、同じ系統の詞章を見ることができ、が、「七月念仏」の場合はこれに該当するものがない。チョンダラーの歌った念仏歌ではなかったということだろうか。非常に謎の多い種類である。



## 詞章 2

- 【凡例】・比較の便宜上、字新川の「七月念佛」の詞章を内容からA～Gの7つの部分に分けた。  
 ・対応関係にある詞章を同列に配置した。非対応であるが、同列に配置せざるを得ない場合は詞章を（ ）でくくった。  
 ・詞章が塊で入れ替わっている部分の関係を、点線括弧と矢印で示した。  
 ・竹富島の「七月念仏」の出典は上勢頭亨『竹富島誌 歌謡篇』

### 字新川 「七月念佛」

A 1 あぬやまてらにさりうりて  
 むぬぬ あわり やりてからや  
 いまじよう さんなる ちくでんさ

B 2 ふたりぬうや あとうぼとうり

C 西にむかゆて きようむん かき  
 ひがしにむかゆて きようむん ゆみ

D 3 かくだる きようむん ちちがたみ  
 ゆむだる きようむん ははがたみ  
 うきとりたまわり ちちがはは  
 4 うきさしたまわり ちちがうや  
 さしうきたまわり ははがうや  
 ふたりぬうやぬ たみどうもうす

E 5 うじぬすらういな さびぎざしむぬ  
 しそいぬはんき すいぬみずう  
 そりかはぬくゆる うちやどうみず  
 6 くばししる そやかあんや  
 ふかにいるそろんに まつらな  
 ふたりぬうやぬ たみになる

F 7 くるゆ七月 なかぬそころん  
 むちゆるたからぬ ありばくそ  
 ふたりぬうやまは いらさなり

G しゅんちやなる ことぬ ヨー  
 いやなはみだぶとうきまい  
 ふたりぬ うやぬヨー  
 いや たはみどうもうす

### 竹富島「七月念仏」(坡座間集落)

あの山寺に 差し登てい

今門のさんや すくでんす  
 物のあわりぬ 道やりどう

二人の親の後身取る

東に向てい 経文書き

西かい向てい 経文読み

書くたる経文や 父がため

読むたる経文や 母がため

受取り給わり 父よ母

差し取り給わり 祖母よ母

(来る夜や何時夜てい 尋ぬりば)

(来る夜や 七月ぬ 中ぬ精霊)

(あぬたきなつかし夏の山)

(是ほど浅ましい 事やねーぬ)

持ちたる寶ぬ あらばこそ

持ちたる寶ぬ ねんやりどう

二人の親に 参らさん

外参る茶 しょう参らさば

二人の親の ためどうなる

(残たる茶水 くぶしゆか)

(をぎのすら うる なすびきじやん物)

(活きる花木に 水添てい)

添々のはんき 添ぬ水

尊重なる徳目や 親のたみどうなる

南無阿弥陀佛

譜 4

- 【凡例】・歌の旋律は、各楽句を判別しやすいように一段毎におさめた。そのため一段の小節数は一定でない。  
 ・字新川の「七月念佛」と比較しやすいよう、旋律を同じ高さに移調した。実音は短7度下である。  
 ・三線伴奏は紙面の関係上省略した。  
 ・歌の三楽句と比較分析を行うために、最後の詞章についた旋律を(1)~(3)でくくった。

## 竹富島の「七月念佛」

玻座間東集落

採譜 飯田くるみ  
 (2010年8月23日調査)

あ の や ま に は に よ さ し め ぶ て い

ヒヤルガ

い ま じ ょ め さ ん や よ す く で ん す

ヒヤルガ

む め よ ヨ あ わ り め み ち や り ど う

ヒヤルガ

(1) そ ん じ や な る と く め や う や め た み ど う な る

ヒヤルガ

(2) な む あ み だ ぼ と き あ み だ ぼ と う き

しかし、沖縄本島での伝承について、わずかに情報を得ることができる。現在は絶えた中南部の念仏主体型エイサーで歌われていた「山寺」という種類が、「七月念仏」と同系統の念仏歌であることが分かっている。現在、南風原町の字照屋と、旧具志頭村の字安里の2箇所の記録を確認している。<sup>16</sup>字安里のも



〈写真2〉竹富島座間東集落のアンガー。念仏歌「孝行念仏」(迎えの日に歌う)に合わせて、アンガーが輪になり踊っている。(2010. 8. 22 飯田くるみ撮影)

のは「ナア念仏」と呼ばれ、戦前まで歌われていたそうである。この「山寺」念仏も沖縄本島の他の念仏歌同様に、2楽句編成の旋律にのせて歌われていただろう。詞章は「山寺」と「ナア念仏」でまず大きな差異があるためここでは比較を行わないが、八重山の離島の「七月念仏」よりは新川の「七月念佛」に近い、簡潔なものである。

#### 4. 字新川の獅子祭りと字登野城の獅子祀り

ここでは、字新川の獅子祭りを同じ四箇字の登野城で行われる獅子祀りと比較し、両地域の獅子祭りで念仏歌が果たしている役割と、行事自体の意味について考える。

登野城の獅子祀りは毎年、旧暦の7月16日に行われる。平成22年度は弥勒と獅子の家元<sup>やーむとう</sup>であるアラスクヤーにて、午後5時から行われた。主催は字会と獅子保存会で、参加者はウヤジャーや獅子保存会のメンバーである。座敷内には歴代の字会長や役員、<sup>じかた</sup>地方が座り、司2名の立ち会いの下、祭事は厳粛に進行した。以下に、平成22年度の式次第を記す。

## 平成22年 登野城「獅子祀り」

- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| 1. 弥勒と獅子への感謝と祈願        | 9. 乾杯                    |
| 2. 字会長の挨拶              | 10. ♪「鶴亀節」「あかまた節」        |
| 3. 石垣市長の挨拶             | 11. 今年の結願祭について（前回当時の会長）  |
| 4. ♪「無蔵念仏節～念仏口説」       | 12. ミルク面新調について（作者 新城弘志氏） |
| 5. 前字会長の挨拶             | 13. ♪「揚古見ぬ浦」「夜雨節」「ヨーホー節」 |
| 6. ナナツガニ               | 14. 新城貞美氏の挨拶（今年からミルク役引継） |
| 7. ♪「鷺の鳥」「めでたい節」「かたみ節」 | 15. ♪「ミルク節」「やーらーよー」      |
| 8. 獅子祀りについて（石垣博孝氏）     | 16. 交酌後、庭で獅子舞            |

初めにアラスクヤーを管轄する奥間司と、小波本御嶽の司によって弥勒と獅子に供物が供えられ、口飾りが唱えられた。口飾りが済むと一同が拝礼し、字会長と市長（字出身）の挨拶をはさんで「無蔵念仏節」と「念仏口説」の演唱へと進んだ。歌三線に笛と銅鑼、手拍子が加わった。「念仏口説」は1年の内、行事ではこの時しか歌わないという。その後、獅子舞のナナツガニや祝い歌の演唱、獅子祀りの由来についての説明があった。また、12年に1度の結願祭を10月7日に控え、これに関係する話も多く出た。そして、「ミルク節」「やーらーよー」で一旦締めた後、庭で獅子舞が行われた。獅子は笛と銅鑼が奏でるナナツガニで舞い、カンター棒も登場した。

新川と異なる点が幾つかある。まず、登野城の獅子祀りでは、獅子の他にミルク（面）も祈願の対象となる。またそれに伴ってか、通常は旧暦の7月中には表に出ない司が立ち会い<sup>17</sup>、厳かに行われた。“祀り”の字に象徴されるものが何か感じられる雰囲気があった。一方の新川では現在、結願祭などミルクが登場する行事自体が行われていないそうである。行事歌も異なっている。獅子祀りでは「無蔵念仏節～念仏口説」と節歌の祝い歌、後半には豊年の予祝歌などミルクと関係がある歌も歌われた。「無蔵念仏節」は登野城村の宮良善勝（1739-1803）によって改作されたという伝承があるため、字では特に大切にしている背景がある。また、新川ではナナツガニの奉納や獅子舞は見られなかった。それから、口飾りによると獅子は神又前であるが、新川ではその意識があまりないそうである。登野城の口飾りは喜舎場永珣によって紹介されている。ここでは内容を解説した

部分のみ引用する。

### 登野城の口飾りの大意<sup>18</sup>

七月に獅子と弥勒仏の祭を仕上げるのは、村中を守護して下されて悪疫が流行しても島の風下へ追いやって村中へ風邪など罹らして下さらんように。其上村民の健康なるように祈って下された上によい幸福ばかりの平和な村にして下さいとの御願である。

口飾りの内容は新川も登野城も大体同じであるが、登野城では、ミルクに豊年と村人の生活安定、獅子に村の護り、弥栄、安全、豊作、魔除け等を願っているという。<sup>19</sup>また、他に“無縁仏を無事に帰す”、“お盆の翌日に寝ていて引っ張っていかれないように”等、清めに使われたのが獅子であるという話もあった。新川は獅子のみなので、祈願する内容が分かれるという話は聞かなかったが、例えば、「七月念佛」を始めとする行事歌一曲一曲がそれぞれの祈願のために歌われている、ということ等はあるだろう。そこで、獅子祭りの行事に登場する要素が、祈願の内容にどのように対応しているか考えてみたい。

次に各行事の目的（祈願の内容）と、行事に関連する要素の対応関係を考察し、表にまとめた。新川の行事の目的（祈願の内容）については、注の2の事項も参考にしている。

表 1

行 事		字新川 獅子祭り	字登野城 獅子祀り
目的 (祈願の内容)			
新築の家の	繁盛、幸福	「とうんぎゃーら」	
	健康	獅子	
	(魔除け・清め)	(獅子)	
字(民)の	弥栄、幸福	「とうんぎゃーら」、獅子	獅子
	健康(無病息災)	獅子	
	世界報、豊年、豊作	「とうんぎゃーら」 獅子	ミルク、豊年予祝歌 獅子、豊年予祝歌
	護り、安全 魔除け	獅子 獅子	獅子 獅子
無縁仏の	供養	「七月念佛」	「無蔵念仏節～念仏口説」
	祓い	獅子、「七月念佛」 (銅鑼・太鼓)	獅子+ナナツンガニ、(銅鑼) 「無蔵念仏節～念仏口説」

念仏歌については、どちらも獅子祭りと関係するいわれは特にないようである。しかし、旧盆の終わりに字全体で行われる行事として、やはり無縁仏の供養と送り出し、悪霊の祓いの目的で歌われていると考える。そして、銅鑼と太鼓の鳴り物にも、こういった清めの意味があるであろう。また、獅子にも同じ役割が与えられており、登野城の場合はナナツンガニがこれに加わっている。字（民）に関する祈願では、内容が重複しているものもあるが、新川では獅子に健康（無病息災）と弥栄、豊作、護りを、「とうんぎゃーら」を歌うことで世果報、幸福を願っていると思われる。登野城の場合は、ミルクに豊年（生活安定）、獅子に弥栄、豊作、護りを頼み、さらに豊年の予祝歌で豊年の縁起を担いでいる。また、新川では新築の家の祈願もしており、家人の健康や護りを獅子に、繁盛と幸福を「とうんぎゃーら」に託していると考える。喜舎場永珣は「八重山群島における盆行事」に、

何れの島でも新築した家では魔除けと称して盆三日の内か或いは十六日の儀式前に、銅鑼の合図で獅子が其家を一周するという風習が今もなお残っている。（喜舎場1977 pp.361）

と、旧盆に獅子が新築の家を訪れるという風習が八重山各地にあり、魔除けの目的で行われていたことを記述している。石垣島では伊原間、白保、大浜、宮良等に現在もこの風習が残っている。新川で、獅子祭りを新築の家で行うのは自然であることが分かる。

獅子祭りの願いは、“世願ゆゑにがい”と“世果報”の大きく2つに分けることが出来る<sup>1</sup>と考えるが、行事の時期と祈願の項目数から考えると、この行事でより重要なのはやはり獅子による“祓い”の方であろう。その中で、念仏歌も獅子と同じ、祓いと供養の役割を果たしている。しかし、“世願ゆゑにがい”の方も付け足しではなく、“祓い”の祈願と相関するもので、新川では「とうんぎゃーら」、登野城ではミルクの存在と豊年の予祝歌をもって、祓いの後に新築の家や字の幸福を願う重要なものであると考える。

## まとめ

字新川で伝承される念仏歌「七月念佛」について、次のことが明らかになった。1つ目は、八重山の古謡に似た歌われ方がされているということである。三線伴

奏無しで、最後がユングトゥになるという歌い方は、同じ獅子祭りの行事歌の「とうんぎゃーら」にも似ており、新川の「無蔵念仏節」とは旋律も大分異なっていることが分かった。2つ目は、竹富島の「七月念仏」と詞章が近いということである。ユングトゥにあたる最後の部分の詞章にも、旋律が独立するという同様の特徴が見られた。しかし、「七月念仏」の旋律は「七月念佛」とも「無蔵念仏節」とも少しずつ違っており、こちらも島で独自の変容を遂げたことがうかがえた。3つ目は、沖縄本島の「山寺」念仏との関係である。「七月念佛」と同じ「七月念仏」系統の沖縄本島における伝承について、僅かではあるが、情報を得て比較を試みることができた。両者の詞章は比較的近い関係にあることが判明した。この種類の念仏歌がチョンダラーによって歌われたという記録はないが、沖縄本島と八重山諸島の両方に伝承があり、八重山では主要レパートリーとして定着したことも明らかになった。「山寺」念仏（「ナア念仏」）を歌った旧具志頭村字安里のエイサーの、地謡が庭の真ん中の敷物に座って周りを踊り手が反時計廻りにまわるというスタイルは、現在のエイサーにはなく八重山の離島に見られるものである。沖縄本島の古い念仏主体型エイサーとの関係を考慮に入れると、八重山への念仏歌の伝播について新たな視界が開ける可能性がある。

また、新川と登野城の2地域の獅子祭りを対比させながら、念仏歌の果たす役割の他、行事に関わるその他の要素と祈願との対応関係や、“祓い”が主体であるが“世願い”と表裏一体であるという、行事の意味について導き出した。なお、獅子祭りは節祭や八月十五夜の時に言い、念仏歌を歌わない地域もある。これらの事例についてはこの結論はそのまま該当せず、また各々検討が必要になるであろう。

本論文の作成に際し、新川字会と登野城字会の皆様、特に嵩本安意、比屋根重雄両氏、また、竹富島の皆様にもご協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

## 注

- 1 該当する家がない場合は、字会館が会場となるという。
- 2 平成22年度の獅子祭りで配布されたプログラムには、昭和55年に嵩本正宜氏が記録し

た文章が掲載されており、この中に獅子祭りの祈願についての記述がある。

「…獅子をあやかり全住民の健康と幸福、村の弥栄そして豊作、魔除けを村の長老、幹部の方々にしてもらっていました…」

- 3 平成20年度、平成22年度獅子祭りプログラムより。この部分は、入嵩西清佐氏の『八寿を迎えて -新川村と共に-』から引用がされている (pp.178)。
- 4 厳密に言えば、この時期しか歌えない歌である。八重山諸島では念仏歌を旧暦の7月以外は歌わない地域が多い。旧7月7日～旧7月16日のみ歌ってよいという所もある位である。
- 5 新川字会は、真乙姥御嶽での穂花上げの儀式とミシャグパーシを2日目（ユーニガイ。ムラプーリィとも言う）の午前中に行う。
- 6 現在は、豊年祭の行事歌として決まって歌われているわけではない。しかし、かつては真乙姥御嶽でのミシャグパーシを終えたこの時に「フナーブス」「とうんぎゃーら」「ミルク節」「やーらーよー」の4曲を歌い、その後長崎御嶽へ皆で向かったという。祖父の真津氏（明治19年生）からこの話を聞いた嵩本安意氏（新川古謡ユンタ保存会会長）が、伝統を絶やしてはいけないと意識的にこの4曲をリードして歌っている。また、1日目の長崎御嶽のミシャグパーシの後にもこの4曲が歌われていたそうで、歌い終わると1日目の行事が終了したという。嵩本氏自身も小学4、5年生の頃に祖父に連れられて行った時に見て、その光景をうつつらと覚えておられる。

喜舎場永珣の『八重山古謡』にもこんな記述がある。「とうんぎゃーら」と同系統の歌である、大浜の「東から」の解説内に、

大浜村も新川村も豊年祭の御嶽での巻踊りの際は、この古謡を謡って古舞踊の巻踊りをしていたが、近代になって新川では他の巻踊りに代ってしまい、この古謡の巻踊りは埋滅している。（喜舎場1970 pp.441）

「とうんぎゃーら」はれっきとした豊年祭の行事歌であったが、いつの間にか行事歌から外れてしまったようである。また、この歌は他に新築祝いの時にも歌われてきた。この時は「松金ゆんた」「とうんぎゃーら」「弥勒節」の順に歌うという。

- 7 沖縄県教育庁文化課1980 pp.20-21
- 8 今から4、500年前に川平西村の長田茂利という人が、浜に漂着した大きな箱の中に恐ろしい怪物の木の彫刻を発見した。そのうち誰かが獅子頭ではないかと言い出したので、これは個人の家に置くものではないと思い、村に提供したという。これを聞きつけた他



村の人々が獅子は万物の長者とも言われているとのことで、それぞれの村で獅子頭を彫刻させ村人の無病息災を祈願し始めたのが新川村の獅子祭りの始まりであるという。(入嵩西2001 pp.176-177)

- 9 350年程前に新川に住んでいたデッター（中国から漂着した人物で、後に島の女性と結婚して「唐真」を名乗った。）という男が、南方から漂着した人を助けたお礼に棒踊りと獅子舞を伝授された。この内の踊りが南風ぬ島カンター棒である。「唐真家」（トーマー）の家宝として伝承されてきたが、デッターから4代目の山多の時に、新川村が創建（1757年）されたのを機会に、字の芸能として受け継がれるようになった。橋や御嶽の落成式などでお払いやお清めの意味で披露されてきたという。1942（昭和17）年以降途絶えていたが、1961（昭和36）年の石垣小創立80周年の際に古老の話を元に復活した。1989（平成元）年には保存会が発足し、翌年には石垣市の無形民俗文化財に指定された。2008（平成20）年には「新川村南風ぬ島カンター棒舞い獅子舞定本」が発刊され、その記念に披露の機会が持たれた。小学生に対しても伝承指導が行われている。

10 日本放送協会編1989 pp.147-148

11 (財) 沖縄県文化振興会 2008年。

- 12 大城學によると、八重山民謡では、一つの民謡を二つ以上の曲で歌う時に、第二番目か第三番目の曲に「裏声」という名称を付すという。しかし、この「裏声」は代表的な名称で、他に「とうしい」「ばいみ」など21通りの名称が存在する。また、「裏声」に対して、第一番目に歌われる曲には「本声」「本句」「ながみ」の名称が付く。名称は地域・字によって特徴があるが、ひとつには歌が収録される民謡（古謡）集において、編者によって統一されていることが考えられるという。

- 13 女エイサーは太鼓に合わせて歌い、踊る。大浜地区の「七月念仏」は、イタシキバラで行われるヒヤルガガッサイで笛と銅鑼の伴奏にのせて歌われる。また、南城市手登根のエイサーも昔は三線を用いず、鉦と太鼓、女性の鼓と道化役のパーランクーのみであった。踊りの前にはガクの吹奏もあったという。山内盛彬が大正の初めに首里のアンニヤ村でチョンダラーから採録した念仏歌にも、三線伴奏は付いていない。しかし、この旋律は現在民俗芸能の中で歌われている念仏歌とは異なるものである。その形式も、前者は歌詞ごとに異なる旋律が付く通作形式であるが、後者は同じ旋律を繰り返す有節形式である。前者の旋律は、現在は伝承されていない。詳細は、著者論文「楽譜に見る念仏関連資料の関係とその構成」（『沖縄文化』110号に掲載予定）を参照のこと。

- 14 大正15年12月の施行から昭和22年7月まで。石垣島の西部域を占め、四箇（登野城、大川、石垣、新川）、名蔵、崎枝、川平、桴海の8つの字から成っていた。石垣島のその他の地域（東部域）は大浜町であった。
- 15 「八重山群島における盆行事」（昭和15年発表）では円陣舞踊と表現している。
- 16 南風原町照屋の「山寺」：南風原町史編集委員会2003 pp422。旧具志頭安里の「ナア念仏」：池宮1990 pp.324-326。
- 17 石垣市宮良のイタツキバラ行事にも司は参加する。  
宮良村のイタチキバラは、三つのトゥニムトゥをチカサ、村の幹部役員、長老格の有志が、集団でまわる形をとる。「七月念仏謡」で巻踊りをし、「ウムイヌヤムトゥベー」（物乞い謡）を斉唱して、酒肴や余興にあずかる。ある種の厳肅さを持ちながら、和気あいあいとしており、にぎにぎしい中に温かい絆のようなものが漂っている。（石垣1981 pp1-20）
- 18 喜舎場1977 pp.362。
- 19 牧野1975 pp.137-138

## 参考文献

- 赤田光男 1988年。『家の伝承と先祖観』人文書院
- 池宮正治 1990年。『沖縄の遊行芸 ―チョンダラーとニンブチャー』ひるぎ社
- 石垣市史編集委員会 1994年。『石垣市史 各論編 民俗上』石垣市
- 石垣博孝 1981年。「宮良村のイタチキバラ」『石垣市立八重山博物館紀要』創刊号、石垣市立八重山博物館
- 入嵩西清佐編 1987年。『新川村古謡集 第一集』新川古謡ユンタ保存会
- 入嵩西清佐 2001年。『八寿を迎えて ―新川村と共に―』私家版
- 上勢頭亨 1979年。『竹富島誌 歌謡・芸能篇』財団法人法政大学出版局
- 大城 學 1982年。「八重山民謡の『裏声』について」『沖縄文化』第59号 沖縄文化協会
- 大演安伴編 1976年。『声楽譜附 八重山古典民謡工四 下巻』私家版
- 沖縄県教育庁文化課 1980年。『沖縄県民俗芸能皆調査第2集 八重山の民俗芸能2』沖縄県教育委員会
- 沖縄市企画部平和文化振興課編 1998年。『エイサー360度―歴史と現在―』那覇出版社
- 喜舎場永珣 1970年。『八重山古謡』上下、沖縄タイムス社

- 喜舎場永珣 1977年。『『アンガマ』と無蔵念仏』「八重山群島における盆行事」『八重山民俗誌 上巻・民俗編』沖縄タイムス社
- 酒井正子 1996年。『奄美歌掛けのディアローグーあそび・ウワサ・死ー』第一書房
- 佐敷町史編集委員会 1984年。『佐敷町史 2 民俗』佐敷町役場
- しかくまめ 2002年。『トゥンナー石垣島発ー』vol.4
- 竹富町古謡編集委員会 2002年。『竹富町古謡集 第四集』竹富町教育委員会
- 當山善堂 2008年。『精選八重山古典民謡集』有限会社ティガネシア
- 日本放送協会編 1989年。『日本民謡大観（沖縄奄美）八重山諸島篇
- 南風ぬ島カンター棒保存会 2008年。『新川村南風ぬ島カンター棒舞獅子舞定本』
- 南風原町史編集委員会編 2003年。『南風原 シマの民俗』南風原町史第六巻民俗資料編、  
沖縄県南風原町役場
- 波照間永吉 1999年。『南島祭祀歌謡の研究』砂子屋書房
- 外間守善ほか編 1979年。『南島歌謡大成IV 八重山篇』角川書店
- 牧野 清 1975年。『登野城村の歴史と民俗』私家版
- 宮城信勇 2003年。『石垣方言辞典 本文編』沖縄タイムス社
- 宮良賢貞 1971年。「八重山地方の獅子舞と獅子祭の祝詞について」『まつり』17号
- 日本トランスオーシャン 2008年。『colalway 2008真南風』117号
- 八重山毎日新聞 文化欄記事「『カンター棒、獅子舞定本』を発刊 新川・南風ぬ島カンター棒保存会」2008年12月4日。